

第49回日本臨床細胞学会秋期大会

集検喀痰細胞診C判定から発見された癌症例の細胞像

○佐藤丈晴¹⁾、室井祥江¹⁾、神尾淳子¹⁾、柴田真一¹⁾、石田卓^{2,3)}、森村豊^{1,4)}

財団法人福島県保健衛生協会¹⁾、公立大学法人福島県立医科大学呼吸器内科学講座²⁾、

公立大学法人福島県立医科大学附属病院臨床腫瘍センター³⁾、慈山会医学研究所付属坪井病院⁴⁾

【背景と目的】

当施設では、前回の本学会において、集検喀痰細胞診C判定からの発見癌数について10年間の追跡結果を報告した。今回は、癌症例の細胞所見上、C判定としての注視すべき所見を明らかにすることを目的とした。

【対象と方法】

平成4～9年度のC判定で、10年間の経過観察中に発見された上皮道癌を含む癌症例は、22例/73,836件であった。その中で、集検時より5年以内に癌が発見され、標本状態良好な10例の集検時標本および同時期にC判定とし、以後5年間毎年B判定であり、現在も癌が確認されていない28症例（以下陰性例）を対象とした。全例から中等度異型とする細胞を抽出し写真撮影し、大きさ（大・中・小型）と染色性（オレンジ・イエロー・ライトグリーン）をもとに9種類に分類した上で、複数の細胞検査士が、細胞異型の強さにより写真を並べ替えて順列をつけた。

【結果】

対象とした細胞数は、癌症例10例中231個（12～39個/症例、中央値21.5個/症例）、陰性例28例中230個（1～27個/症例、中央値7.0個/症例）であった。癌症例でも異型の弱い細胞が多く、陰性例でも異型の強い細胞がみられた。症例別にみても同様な結果であった。癌症例の細胞に特徴的な所見は見出されなかったが、異型が強い方の細胞は、細胞質がやや厚く、核は濃染し、核形不整であった。細胞異型度のみではなく異型細胞の出現数が多い標本をC判定とすることが重要と考えられた。